

## 市内で発掘された全国初の出土品も展示する 第37回考古資料展「伊勢原の遺跡」を開催します

中央公民館で行われる、公民館まつりに合わせ、令和6年度に伊勢原市内で行われている発掘調査の成果を展示する考古資料展を開催します。

市内で発掘調査された遺跡について、写真パネルやそこで使われた道具(遺物)をとおして、先人たちの生きた暮らしの様子等を身近に感じていただけます。

また、公益財団法人かながわ考古学財団による令和5年度の発掘調査にて、伊勢原市上粕屋・和田内遺跡から出土した、機織りに用いる「箴」と筵打ちに用いる「綜統」の展示も行います。中世の出土品としては全国初となる良好な状態で発掘されたもので、市内で展示が行われる貴重な機会です。詳細は添付資料をご確認ください。

### 1. 日時

令和7年2月7日(金) 午前10時～午後5時  
8日(土) 午前9時～午後5時  
9日(日) 午前9時～午後4時

### 2. 場所

中央公民館 1階 展示ホール(東大竹1-21-1)

### 3. 添付資料

- ・第37回考古資料展「伊勢原の遺跡」(チラシ)
- ・R6 楽しもう考古学記者発表 241202

### 4. 取材について

取材・撮影を希望される場合は、事前に以下の問い合わせ先までご連絡ください。

担当・問い合わせ先

教育総務課(文化財係) 0463-74-5109

# 「伊勢原の遺跡」

令和 6 年度に伊勢原市内で行われている発掘調査の成果を展示します。

市内で発掘調査された遺跡について、写真パネルやそこで使われた道具(遺物)をとおし、先人たちの生きた暮らしの様子等を身近に感じていただければと思います。

**日 時** 令和 7 年 2 月 7 日(金)から 2 月 9 日(日)まで  
午前 9 時から午後 5 時まで  
初日は午前 10 時から、最終日は午後 4 時まで  
(中央公民館まつりに合わせての公開)

**場 所** 伊勢原市立中央公民館 1 階展示ホール

**展示資料** 上粕屋・石倉中遺跡、西富岡・長竹遺跡、上粕屋・秋山遺跡、神成松遺跡、三ノ宮・上入増遺跡、三ノ宮・中尾根山遺跡、上粕屋・久保上遺跡第 1 次調査、上粕屋・久保上遺跡第 2 次調査、石田・引地遺跡第 4 地点、下糟屋・丸山遺跡第 8 地点、上粕屋・和田内遺跡の出土遺物や写真パネル

**問合わせ** 伊勢原市教育委員会 教育部教育総務課  
〒259-1188 伊勢原市田中 348 番地  
電話 0463-74-5109(直通)、0463-94-4711(内線 5216・5217)



神成松遺跡  
弥生住居全景(弥生時代)



三ノ宮・中尾根山遺跡  
YF2 号住居全景(弥生時代)



西富岡・長竹遺跡  
J3 号住居全景(縄文時代)

**主 催** 伊勢原市地域文化財保存活用協議会  
**共 催** 公益財団法人 かながわ考古学財団



令和6年12月13日 参考資料送付

県政記者クラブ 発表 (14:00)

## 中世の出土品としては全国初となる

# 機織りの箒と蕙打ちの綜紵が出土

### ○機織りの箒と蕙打ちの綜紵が良好な状態で出土

令和5年度の発掘調査にて、伊勢原市<sup>かみかすや</sup>上粕屋・和田内<sup>わだうち</sup>遺跡から、機織りに用いる箒と蕙打ちに用いる綜紵が出土した。中世の箒と綜紵が添付写真のように良好な状態で出土したのは、全国初の事例となる。

上粕屋・和田内遺跡は、平安時代末に創建された極楽寺（現廃寺）の伝承が残る地域である。近年の発掘調査で寺院の痕跡を示す出土品等が発見されており、考古学でも伝承が裏付けられている。発見された箒と綜紵は、中世後期の土坑から出土した。

機織り用の箒は、土坑の底面から4本が折り重なる状態で出土した。4本が重なった状態の大きさは、長さ約57cm、幅約37cmとなる。各箒は、長さ約21～43cm、幅約7cmである。箒羽<sup>おきば</sup>と親羽<sup>おやば</sup>の素材は、タケ亜科の稗<sup>かん</sup>の割裂き材であった。4本は長さが異なり、端を欠損しているものもある。そのため、本来は2～3個体であった箒が折れて4本に分割されたと考えられる。箒は、箒羽・親羽・芯竹<sup>かいずる</sup>等で構成されるが、これらの部材がセットで出土したのは、全国初とみられる。箒羽の本数と間隔から、麻などの植物繊維を素材とする布用とみられ、今回出土した箒羽に付着していた糸の素材植物もアサであった。糸は、布の一部である可能性や箒羽を芯竹に括り留める糸の可能性もある。放射性炭素年代測定の結果、15世紀中頃の製品である。

蕙打ち用の綜紵は、箒とは異なる土坑から出土した。大きさは、長さ25cm、幅7cm、厚さ4cmとなる。素材は、クスノキである。綜紵は、端部が残っているが、全長は不明である。断面漏斗形の穴が向きを交互にしながら連続する状況が良好にみてとれる。綜紵とともに、長さ23cmの棒も出土した。綜紵に取り付ける把手であった可能性がある。

両者の出土位置は、中世極楽寺の寺域であったと考えられ、極楽寺には機織りや蕙打ちに携わる職人がいたことを示す出土品となろう。

## 箄とは

布を織る機（地機・高機）の一部品。経糸の密度や織幅を一定に揃える役割をもつ。また、高機では、緯糸の打ち込みにも使われる。地機や高機は、渡来人によってもたらされたと考えられており、5世紀中頃以降に関連する出土品がある。箄は、古くは竹製だが、現代では金属製のものが使われている。現代の箄の規格は、鯨5羽～鯨100羽と表し、鯨尺1寸（約3.8cm）間隔に箄羽がいくつあるかを示す。羽数が多くなるほど目が細くなり、糸の種類によって使い分ける。今回の出土例は、現代の鯨25羽に相当するとみられ、麻などの植物繊維による布用にあたる。関連する出土例としては、静岡県伊場遺跡（8世紀、箄をはめる杵）、群馬県西宮遺跡（江戸時代）などがある。

## 綜紵とは

筵を打つ機の一部品。上糸と下糸を通し、前後させるための装置。上糸と下糸を通す穴が漏斗形で、向きを交互にしながらか配列する特徴をもつ。綜紵の角度を上下に変えることで、上糸と下糸が上下（前後）し、イ草やワラなどの緯糸を入れて、綜紵で打ち、織り込む。出土例としては、埼玉県大久保山遺跡（平安時代）、北海道栄浦第二遺跡（擦文時代）などがある。

## 土坑とは

発掘調査で発見される用途不明の穴のこと。平面形は、円形・長方形など様々。大きさや深さも様々で、明確な基準があるわけではない。なお、同じく用途不明の穴のうち、直径数cmから40cm程度の大きさのものは、ピットと呼ぶことが多い。

## 稈とは

竹・稲などの植物の中空な茎。

※本内容については、福井大学東村純子准教授、金沢大学佐々木由香特任准教授に事実確認等頂いている。

## ●出土品展示を開催

今回、機織りの箄と筵打ちの綜紵の保存処理が終了し、皆様にご覧頂けるようになりました。ついては、「楽しもう考古学」にて箄と綜紵を展示します。

日 時：令和6（2024）年12月21日（土）・22日（日） 10：00～18：00

開催場所：新都市プラザ（横浜新都市ビル（そごう横浜店）地下2階正面入口前）

内 容：出土品の速報展示

（問い合わせ先） 公益法人かながわ考古学財団

出土品整理課 松葉（調査担当） tel:045-842-9888（野庭出土品整理室）

企画調整課 高橋（展示担当） tel:045-252-8689（財団本部）

調査研究部 大塚（調査研究部長） tel:045-252-8689（財団本部）



C79 号土坑箴出土状况



箴出土状况



一番上の箴（裏側）：保存処理後



二～四番目の箴：保存処理後

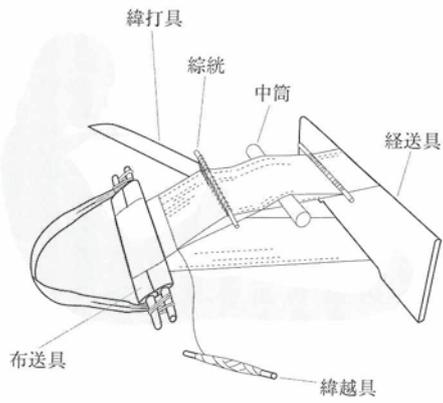


C75 号土坑綜紵出土状況

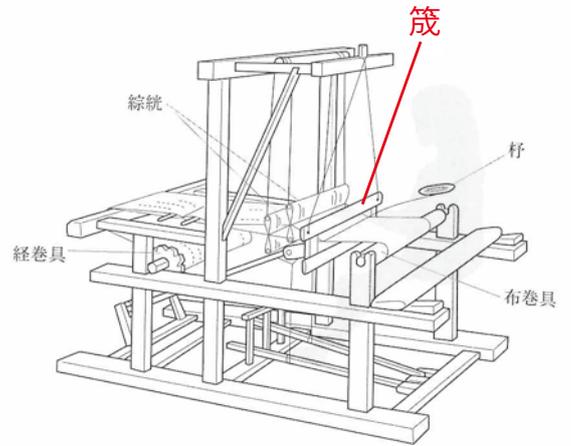


綜紵と綜紵把手か：保存処理後

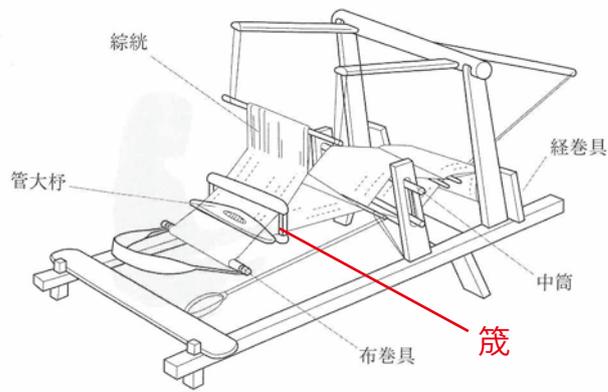
※上記の出土品（箆・綜紵・綜紵把手か）は、神奈川県教育委員会所蔵。



織機 輪状式の原始機  
輪状式無機台腰機  
構造上箴は付けられない



高機  
箴が付く

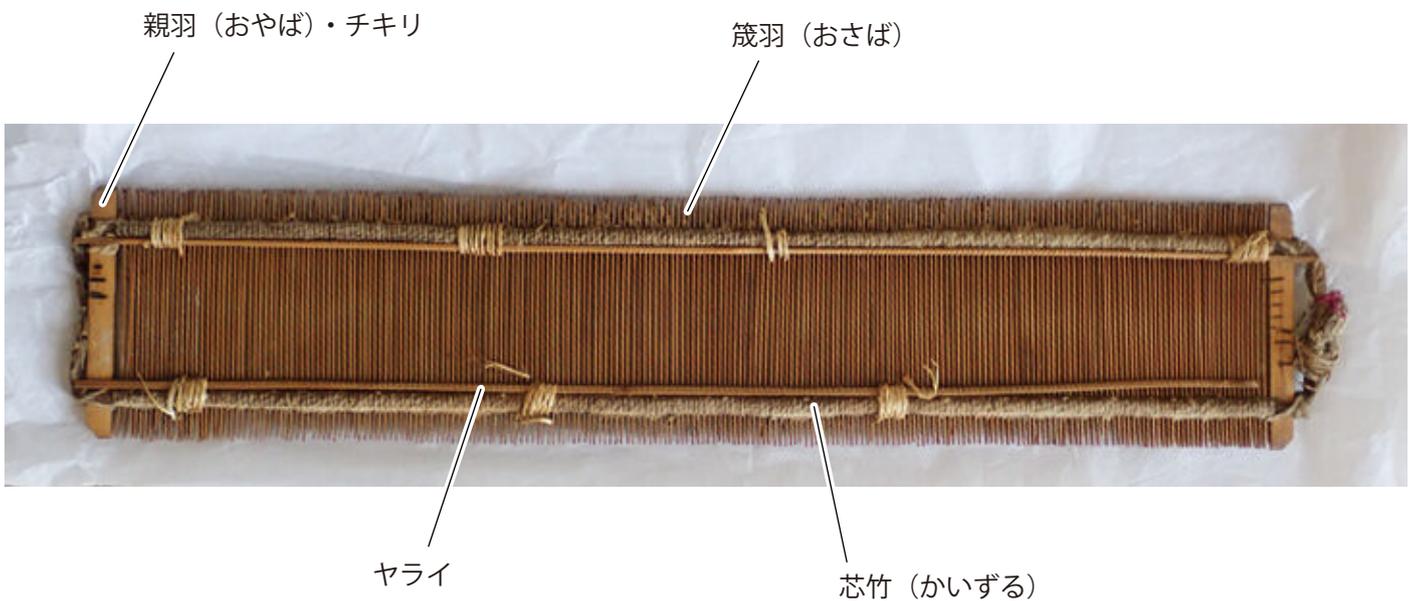


地機  
直状式有機台腰機  
箴が付く

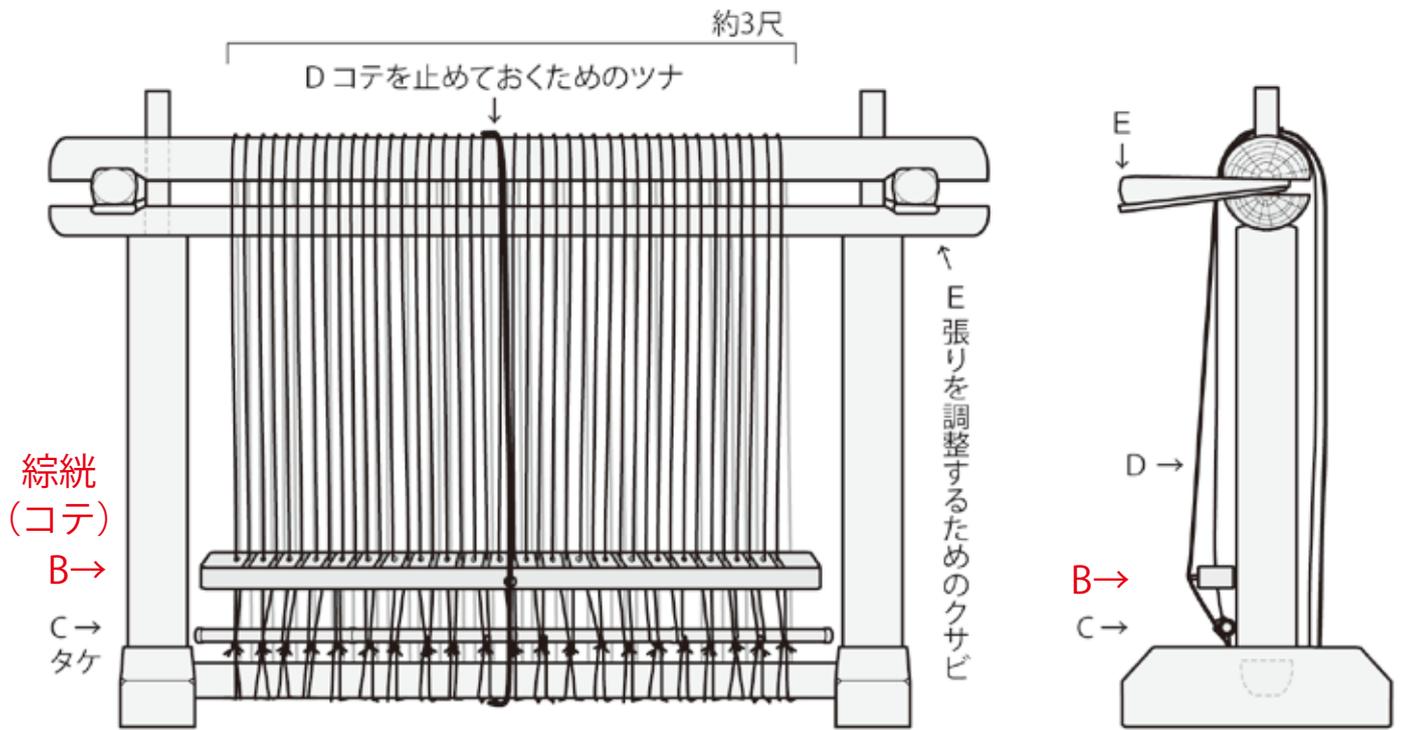
挿図出典

東村純子 2016 「織機」『日本生活史辞典』 吉川弘文館  
に加筆

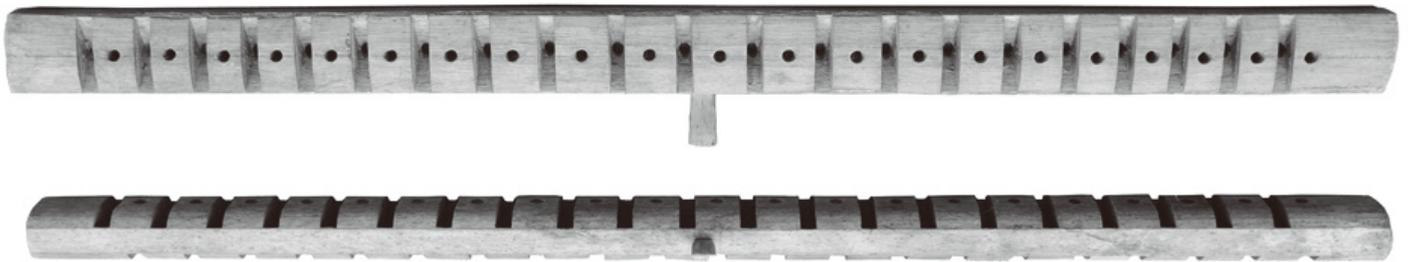
### 織機の種類と部材名称



箴部位名称



西谷の筵機



筵機の綜続

挿図出典

今石みぎわ 2012 「筵と筵織りの技術」『無形文化遺産研究報告』第6号 東京文化財研究所  
 に加筆